農村協同体化論

手塚信吉

今の日本の重大課題のひとつに、零細個人農家の危機対策がある。こんな半身不随農業をそのままでは、工業立国日本の障害となる。だが農家自身が決意すれば、禍を転じて福とすることができる。それは、一村協同体化農業である。これこそ国を救い、村を救い、農家自身の救いでもある。

一　協同体時代と日本の農業

人類は協同体である。協同協力のないところに、真の人間社会もない。古い言葉であるが永久の真理であって、資本主義とか共産主義以前の問題である。そして人間界の対立競争も、個人主義的生活も、その時代時代の必要悪の便法であり、文化の発展、社会の進歩に伴って、変遷もあれば改革もあろうが、千古不変のものは、国でも民族でも、何処でもいつでも、協力に栄え非協力に亡びてきたことである。

そして世界はいま対立観文化から協同観文化へと移行しつつある時代であり、奪合いの経済から分かち合いの経済へ、個人生活から協同生活へ、利己主義から利他先行へ、遅々として進行中である。そして協同体社会こそ、新しい時代の生活原理そのものであって個人の幸福も、国家の隆盛も、世界の平和も、その進行方向にのみ期待することができる。

イスラエル国に発達した協同体社会キブツは、この原理に基いて発生し、すでに六十余年の歴史をもち、着々発展して名実ともに同国の中心勢力となっており、世界人類の新しい方向を示唆している。

日本協同体協会は、このキブツの思想精神を取り入れて、日本農業や中小企業の協同化に役立てたい念願から、その普及をはじめて満十年、「月刊キブツ」の発行も、すでに第十巻第五号となった。そして一方、日本の青年男女の希望者をキブツ研修生として、イスラエル国に派遣すること九回、その人員も三百数十名に及んでいる。

その間にあって日本は、アメリカの東亜政策に便乗して漁夫の利を占め、異常なまでに経済発展をとげ、資本主義時代の全盛を思わせるものがあり、協同体思想精神は一歩後退の感さえある今日このごろであるが、時代の動向は日本を置去りにして急進しており、中国の人民公社の刺激もあって、数年を待たずして、協同体思想の奔流は怒涛のごとく押しよせるであろう。

十年一昔で昔話となったが、我々のキブツ運動の初期のころの、新聞雑誌をみた記憶もあろう。アメリカが鎧袖一触と軽視していた北ベトナムの強靱さ、中華人民共和国の底力、民心の安定、秩序の確立世界無比といわれる北鮮の現状、その何れも新時代の方向に従った協同体社会の国力への反映である。

協同体思想の基底をなすものは、人間平等観の思想であり、個人主義、個別対立、不平等社会秩序を固執する日本資本主義の牙城をゆるがすのも遠いことではあるまい。俗に云う一ツ釜の飯を食う間柄である事業会社内で、労使が対立闘争に明暮れしたり、他人の不幸を喜こぶ農民根性、そんな蝸牛角上の争いに終始する時代ではない。

世界の農業人口の三〇%を占める、中国の農民たちが、自ら築き上げた人民公社の発展は、あらゆる旧慣伝統の壁を破って、遂にアジアを変え、世界を変えんとする勢いに発展しつつある実状を軽視することは、悔を百年先まで残すであろう。

先月号掲載の元福島県知事、大竹作摩先生の農村診断は、今の日本農村の実状を浮きぼりにしたものであり、最早姑息な救済手段などで打開できるものではない。高速道路を三輪車で走るような今の日本の農業を道連れにして、国際経済に太刀打ちは出来ない。まず何よりも農業近代化を急ぐことが、最重点国策でなければならない。

二、日本農業の新活路、それは一村協同化のみ

農業は個人に限る。これが明治以来の一貫した日本農政の指導原理であり、農民の私的欲望を刺激する政策に終始してきた関係もあって、日本の農政には協同体思想の進展がない。そして零細個人農家の優遇を中心とした保護政策から一歩も出なかったので、時代逆行の私有小農地重点の農業で非能率、不採算赤字営農を、農外収入によって補足せんとする出稼ぎ労働に転じ、増々農業採算を悪化せしめている。

アメリカでもカナダでも、農業人口は総人口の一〇%以下であるのに、余剰農産物の大量輸出国であるのに、日本の農業人口は総人口の二四%というのに、大量食糧輸入国としてイギリスに次ぐ世界第二位の国である。

そして余り気味なものは米だけであって米に代って主食化しつつあるパンの原料小麦九〇%、日本人の嗜好品である味噌、醤油、豆腐、豆麺等々の原料大豆の九〇%、砂糖や塩の八〇%、家畜の飼料の八〇%、肉でも乳製品でも増加の一途を辿り、既に全食糧の三五%近く輸入に依存しているという。

日本は世界でも稀な、温暖多雨国であり、適地適作よろしきを得れば、既存農耕地六百万ヘクタール、牧野適地三百万ヘクタール、併せて九百万ヘクタール、あれば一億国民の食生活を充分賄うことができるという専門家の意見であるのに、農地の不合理な死地化のために、すでに大量の輸入食料に依存しながら、世界相場の二倍三倍の政策価格に国民が苦しめられている。

日本は地形の関係もあって、農業規模に限度もあろうが、近代農業というからは農民単位を水田なら百ヘクタール、牧野なら三百ヘクタール程度の必要がある。そのためには日本の場合は、一村協同体化、または一部落協同体化の外はない。

それではそんな一村協同化農業が可能であろうか。農民の利己心

を代表するような政治に期待することはできないが、今日では農家が強く目覚めて来ている。昭和四一年四月早々であった。山形県余目町の富樫町長に招かれて、同町の部落部落を一週間に亘ってキブツ講演会、座談会を昼夜二回づつ開催したことがあった。至るところ熱心な会合となり相当手応えもあったので、追い打ち的に二回三回と研修会形式の啓蒙運動を申入れたが、三ヵ月後に町長から書面があった。その要点。

余目町主催のキブツ講演会

「これからの農業は個人経営ではやって行けないことは、殆んどの農家が身をもって理解しているが、いざ実施となると必ず二の足を踏むのは何んとしたことか。

もっとも全国各地の協同化、協業化の不成功や失敗例をみると、農家が決断をしぶるのも無理ではない。農業改革はまず農家の頭の切りかえからと云うので、早くから講演会、研修会、視察旅行とあらゆる方法を講じてみたが、農家の意識革命は経済理論からは出てこないではないか。」

こんな悲観論であった。先覚者の苦心のほどが察せられるが、農家にしてみれば、個人主義から協同主義への転換であり、利己心を捨てて利他先行の革命であるから、二回や三回の講演会や研修会ぐらいで私有農地を共有化することは無理であろうが、協同化の考え方を常識化する点で無駄ではないとお勧めしたが、そのままになってしまった。当時はキブツがめずらしいせいもあって、各方面からの依頼で講演会、座談会の多忙なときであり、余目町のことも忘れていた。

新聞でみると、その後、同町は農林省の模範近代化農業地区に指定されて、大型農機を取り入れて、機械化農業の実験中とあったので、協業化も何等かの形で進んでいるであろうが、農家の意識革命には相変らず苦心のことと推察申上げる。

これは庄内平野の中心地、水田四千二百ヘクタールを持った余目町のことであるが、同じ経緯は、他町村にも沢山あった。もう一例だけ挙げてみると、北海道浦河町上杵臼部落の六百ヘクタール五十六戸の協同化計画がある。進歩的な桜岡組合長が中心になって、早くから協業化が進められ、新聞でみたと云うので拙著『新しい農業キブツ』三五冊の注文があり、それが縁故となって講演会にも数回行った。第一回は田植の真最中で出席者も二十数名であったが、第二回となると五十六戸の農家から七十一人という一二〇%の出席率であり、その協同化への熱意も盛り上ったが、結局は裕福な二、三の人々が踏み切りかねて物にならなかった。

富樫町長の言うとおり、協同化の必要は大半の農家が痛感しているが、いざとなると二の足を踏む。そしてその迷いは有力者ほど強いので始末がわるい。なんと云っても農政当局の消極的態度が癌となっている。

日本キブツ協会を設立したのは一九六二年であり、当時は中国でも連続三年の大凶作もあって、人民公社の失敗が報ぜられていた。だがそんな偏向的な曲解報道をよそに、着々として成果を挙げ、僅か十数年にして協同体社会、人民公社の存在は世界に重きをなしている。これからの日本には、中華人民共和国の思想文化が奔流となって押しよせるであろうが、それを適度に中和して吸収する必要が今の日本にはある。資本主義文化の中で健全に成長してきたキブツの思想文化は、その役割を果すであろう。

三、禍を転じて福とした中国の農業

二昔前の中国人気質を想像しただけでも、およそ協同体社会に不向きな国民性にみえたので、日本人、殊に大人の世代が人民公社の永続性を信じないのも無理ではないが、その有史以来未曾有の偉業と、その成果とが世界を動かしつつある事実を否定することはできない。そして世界は協同体時代に巨歩を踏み入れている。日和見は自由であるが、それだけ置き去りされるのみであろう。

中国でも孫文の辛亥革命以来、農民解放を旗印とし「耕者有其田」が農民に希望を与え、陰に陽に革命軍に協力したことが勝因の一つともなった。そして一九四九年、遂に革命政権は成立した。公約に基いて「耕者有其田」は実現した。即ち地主から農地を没収して小作農民に分与してしまった。自作農となった農民たちの喜びは、手の舞足の踏むところを知らず、筆舌に尽しがたいものであった。

だがそれほど感激しても、一戸当りの農地はせいぜい五畝か六畝（日本流に云って三反か五反歩）、それも点々散在耕地であって機械化も近代化もできない。農民が折角喜んでも、これでは一生貧農でおわり、不作一年で飢民となるだけ。国家百年の大計からみても、農民永久の幸福のためにも、この際、思い切って近代化農業への転換が必要である。流石は達見ある毛沢東政権、協同体化農業の実現に断固として踏み切った。

強制したのでは反抗もあろう。また心から共鳴するのでなければ成果も挙がらない。北京政府の苦心はそこにあった。その経緯を書くと長文になるから一切省略して「大寨に学べ」が一時全国を風靡したように、好見本の人民公社を創設して、実物見本を示し、その素晴らしさを体験させて教導した。

そして一方では国民尊敬と信頼の的である毛沢東主席の思想精神を徹底的に普及し浸透せしめるのみでなく、政府要人も党幹部も一丸となって毛沢東精神を実行し、私欲私心を払拭して農民に奉仕した。そして公正無私な清潔政治の下で、自分は人のため、人は自分のため、より良き社会への奉仕、この協同体精神に徹したのであった。

凶作三年の苦難は北京政権の試金石であった。日本の報道機関も人民公社の失敗を報じていたが、事実は全く逆であった。人民公社制度があったから、公正無私な計画配給も行われ、一糸乱れない秩序が保たれ、あの難局を切り抜け得たのみでなく、その制度の善用が人民公社の成長発展を確立したとも云えよう。そして劉少奇一派の裏切り事件も、文化大革命という世界史上未踏の新方策により一

挙に解決され、中華人民共和国の大成と共に、人民公社の成長安定をみたのであった。

かくして僅か十数年にして、中国農家戸数一億二千万戸、総人口五億五千万人の九五%までが、五万余の人民公社に結集して、着々としてその底力を発揮し国威国力の源泉となっている。

さて農地を地主から取上げて小作農民に分与した「耕者有其田」までは日本も中国も実質的には全く同じであったが、中国では農民永遠の安定幸福のため、且つ国家百年の大計確立のため、高次元の理想社会、人民公社の創立に成功をみたが、日本では占領軍に押つけられた農地改革「耕者有其田」を善政なりとして実施しただけで、当然行詰るはずの零細個人農業の打開策を忘れ、目前の非能率、不採算、赤字農業の尻ぬぐいを、政策価格で補償し、その損失を国民に押付けてきた。果してこの操つりが何時まで続け得ようか。

生産手段の近代化に、資本主義も共産主義もない。また農業だけ例外も許されない。それはアメリカとソ連とを同時にみれば直ぐ判る。今ごろ高速道路を三輪車で走るような零細個人農業を保護温存することは、国民的罪悪であるばかりでなく、農民のためにも罪の上ぬりに過ぎない。「倅の嫁がないのを嘆きながら、自分の娘は農家の嫁にはやりたくない母の心」こんな笑えない笑話が二十年も前から農村の実情として話題となっている。正に深刻極まる政治不信の農家の母の声である。

国家でも民族でも、女性に嫌われたら滅亡すると云われている。女性にきらわれた零細個人農業が滅亡の運命にあるのは必然であろう。三ちゃん農家の一ちゃん候補の嫁女などある方が不思議である。青年男女の九〇%まで農村に魅力を失っているが、それは農業を嫌っているのでなく、百年も時代おくれになっている零細個人百姓を見放したのである。

十年前の話であるが、私が西欧各国の農村を視察した時、西独にも二五日間滞在して各地の農村を訪れた時、フランクフルト郊外のある農家で、農協役員も加わった十数名の会合で農家の主婦の話となった。その地方の娘たちの結婚先の第一志望が農家であり、第二志望が商家で、勤め人は第三位であった。日本とは正に逆である。マインツ川流域の農家を訪れて、なるほどと思った。

世界水準の二倍三倍の政策価格で国民を犠牲にしながら、農業では一家を支えられないので、年々女房子供を村に置き去りにして、出稼ぎ労働者となる。そんな不合理、不経済な農業になんの社会的意義があろうか。農家のためにも先の見通しが何かあるのなら、年間何兆何千億円の国民負担も忍ばざるを得ないであろうが、貴重な国土を何千万分にも切りきざんで、近代化農業からみると無価値に等しい姿のまま零細個人農家を温存し、その農地の私有権絶対の権利を憲法で保証している。国亡びて何の憲法か。人間の作った法律など天理の前には無価値に等しい。天の罪を恐れるところに人の道がある。

四、自給食糧七十%確保が独立国の資格条件

最近農産物価の高騰から輸入食料依存論が台頭してきたが、若し今の日本農業をこのまま放任すれば、農産物は世界水準の二倍三倍どころか、五倍六倍になっても不採算化するであろう。そんな不当価格の食料品に耐えて工業立国日本が成立つはずがない。いやでも

輸入食料依存度を高める外はないが、自給食料五〇%を割った途端に日本は独立国の資格を失うであろう。

世界大戦二回ともイギリスは外交で勝ったが、戦争では敗けていた。その主原因は自給食料の欠乏にあった。ドイツは外交で敗けたが、戦争では常に勝っていた。それは主として自給食料七〇%を常に確保しており、戦時下食料対策が合理的に行なわれていたからであった。自給食料七〇%を常時確保しておれば、戦時下国民を飢餓の恐怖にさらすことはないという大戦の教訓は、イギリスに於ても国策として最低食料自給策を重視していると聞いたが、西独では重要国策として、食糧自給率七〇%確保を絶対線とし、悪気候の不利を忍んで、小麦の生産にも補助金対策で一定量を確保しており、EEC食料対策会議でも価格協定等でフランスとの間に紛争の絶えないのもそのためである。

四方海をめぐらす日本の立場は、弱点からみて西独の比ではない。日本の場合、自給食糧七〇%を割ることは、独立国家の資格喪失を意味するものであって、最早軍備も国防も無意義であり「日本殺すにや刃物はいらぬ。輸入食料絶てばよい」となるのである。日本独立の第一義は挙国一致体制であり、第二意義は自給食料七〇%以上確保であり、軍備の如きは第三義以下である。この点を見損ずると、とんでもないことになる。

先にも述べたが、日本の既存農耕地は六百万ヘクタール、牧野適地が三百万ヘクタール、そして世界でも稀れな湿暖多雨国であって土地も肥沃であり、これを合理的に経済的に活用すれば総人口が一億二千万人になっても、澱粉食も蛋白食も何んとか自給自足が可能であるというのに、現在のような無計画、無方針、野放図な無駄使い放任主義では、今の人口でも遠からず自給率五〇%以下に低下必然であろう。

現に余り気味なのは米だけ、米に代って主食化して来たパンの原料小麦の九〇%、日本人の嗜好品である味噌、醤油、豆腐、納豆、豆麺等の原料大豆の九〇%、家畜の飼料の八〇%その他多量の輸入食料に依存し、食料自給率は七〇%を遙かに割っているであろう。

その自給食料も世界水準の二倍三倍の政策価格で保護して生産されたものであり、経済学からみた日本農業は、破産した禁治産者にすぎない。そして私有農地の乱用は、全国的に拡大して農地変じて遊休地となり、至るところ土地ブローカの活躍舞台となり、別荘地、日曜農場、夏季休養地と、五十坪、百坪と寸断分譲地となり、熊の住家の北海道の片隅まで切りきざんで、空しい個人主義、利己主義の餌食となっている。泣いても笑っても国土の総面積は三七万平方キロ、その内農地宅地となる平担地は十二万平方キロ、日本人一億人の衣食住の錦地であることを、忘れている。

五、零細個人農業温存は農家としても自殺行為

「農業は個人に限る」これは明治以来の日本農政の牢固とした基本国策であった。だからあらゆる農業法規も指導方針も、零細個人農本位であり、その最も顕著な政治性格のあらわれが、終戦直後の農地改革の処置であった。発想は占領軍であっても、時の日本政府はそれを善政として受入れた。小作農民も目先の欲望に大満足であった。さてある一点が西独とも、中国とも異って全く取り返しのつかない国運の癌となっている。

農業は個人に限る――政治家の大半は最近までこの主張を変えていなかった。最も変えたら落選したであろうが、この伝統的な農業政策が、農村の保守性と結びついて、農業だけが産業革命の試錬をのがれて今日に至り、時代の遺物化して終ったのである。

日本のような、狭い国土の農業は多収獲政策も必要であるが、更に一層必要なことは時代に応じた生産体制である。国民の生命源である食料の価格が世界水準の何倍にもなるような生産体制を、そのまま保護温存する政治は、民族子孫の名に於て許せることではない。非能率不採算、時代遅れの零細個人百姓を放置するだけでも政治の怠慢であるのに、それに手厚い保護を与えて温存するに至っては何をか云わんやである。

日本のような加工貿易立国を真使命とする国柄では、良品廉価主義で世界に奉仕するところに生存の意義がある。不当高価な食生活に耐えて国際競争の太刀打ちはできない。股鑑遠からず、人間平等、皆労働体制下の中国工業の発展進出が、数年を待たず、手痛くそれを立証するであろう。

元々農業は、あらゆる産業の中でも、最も大規模機械化に適する業種であって、作業能率の十倍化も、生産量の二倍化も可能であるが、日本の現状では一村協同化、一部落協同化が必要となる。だが零細個人農業を不当保護温存したのでは、その協同化ができない。

山村に端を発した農村の過疎現象も、結局は零細個人農業の没落であり、それが次々に平野農業に波及し、まず三反五反百姓から犯されて、一町歩農家に及び、今は三町歩四町歩農家まで悲鳴をあげている。そして年々半年近くも妻子を村に置き去りにして出稼ぎ労働者となり、一家を支えている。

この不自然、不健全な二重生活がもたらす弊害は民族子孫に及ぶ罪業であり、一日も放任すべきではない。副業化した農業、片手間仕事の出稼労働、その何れも文化の反逆であって国家的損失である。そして最早姑息な如何なる手段も事態の解決にはならない。唯一の、活路があるとすれば、それは一村協同体化あるのみである。

六、日本農業の活路は一村協同体化あるのみ

昔はどんな産業でも個人企業であった。それが明治以来の産業革命の試錬の中で、片端しから陶汰されたり併合されて、歩一歩と近代化され、今日の発展をとげ、世界市場に太刀打ちのできる企業に成長したものだけが生き残っている。ところが農業だけは頑固な保守勢力に誤られて、「農業は個人に限る」で世界を忘れ、歴史の遺物化してしまった。

そしてこんな高速道路を三輪車で走るような零細個人農業を保護温存するために、世界水準の二倍三倍の政治価格で国民の食生活を苦しめながら、その農家は農業では一家を支えることもできず、毎年女房子供を農村に置去りして、都市へ出稼ぎ労働に出る。

こんな非文化的、非科学的、非人道的な実状を矛盾とも不合理とも考えず、他人ごとのように放置し、農村農家の根本的な立直しを忘れているが、数年を出ないで歴史の遺物化した零細農業が救い難い悪性癌となって日本そのものの危機を招くであろう。

六年前であるが、山形県の米産地余目町の富樫町長の云われるように「これからの農業は個人経営ではやって行けないことは、殆んどの農家が身を以て理解しているが、いざとなると二の足を踏むの

は何んとしたことか。」この一言こそ日本農民の真言である。明日の為の政治があれば、農家は忽ち決断がつく。

思い出すと私のキブツ運動の初期のころであった。新利根協同農場を訪れて一泊し、上野組合長の話をきいた時、ああ日本農政あやまれりの感を深くした。「農業は個人に限る」この誤った保守頑迷な農政が、日本及び日本人の子々孫々までも苦しめるであろうと、はだに粟を生ずる思いであった。

新利根協同農場というのは、満州から引揚げた上野満さんが、利根川下流の湿地帯水田化に着目して、百ヘクタールほどの開拓計画を立案して、払下げ願いを出したが「農業は個人に限る」農政が邪魔して、農家一戸当り最高二ヘクタールしか許可しないという。即ち法人化も共同化も許さない。（この地帯は満潮時になると、深さ一米ぐらいの水没地であり、耕地化するには周囲に防水堤を築き、一米以上の土盛りをする必要があり、個人農家などで開拓できる土地ではなかった。だから不毛の湿地帯として何百ヘクタールも放置してあった。）

そこで上野さんは一策を考えて、山形県下で青年を集め、十五戸分三〇ヘクタールの払下げを受けて、協同協力して開拓することにした。ところがその協同化が当局の忌憚にふれて、補助金も低利資金の貸出しも断われてしまった。やむなく八方苦心の末、農地開発では例のない、年一割二分という高利の資金を借りて必死の努力で造田した。そして十五年の成果が、有畜農業で水田三毛作、年間生産高四千万円という全国的にも有名な共同農場が完成したのであった。

もし最初に上野さんの出願通り百町歩を許可しておれば、補助金がなくとも、低利資金の恩典がなくとも、今ごろは年産一億五千万円、所得税一千万円ぐらい毎年納税できる共同農場が一〇農場ぐらい出来上っていたであろう。

こんな例は全国に沢山あった。近代化農業の必要から法人化を出願した人々も無数にあったが、「農業は個人に限る」という農政が法人化の障害となっており、共同化に至っては共産主義と誤解されていた。（農業法人の制度が生れたのは十年後であった。）

共同農業の先覚者は、どこでも圧政に苦しんでいる。奈良県の心境農産は昭和十三年から四家族の共同農業、共同生活をはじめたのであるが、世間ではそれを共産主義者と白眼視して、悪意の投書をした。警察署ではそれを本気にして特高警察の手で拘引する。幾度も留置場入りをさせられている。その心境農産が今日では奈良県の誇りとなっている。

数え上げたら全国に数十ヵ所もあろう共同農場も「農業は個人に限る」という農政に邪魔されて、拡大も発展も阻害されてきたが、ここまで零細個人農家が行詰ってくると、農政当局も方針一変の外はあるまい。ところが零細個人農家が、農業は見捨てても土地思惑に興味を持ち、共同化も併合化も承知しないであろう。そんな反社会的気風が全国的になってきているようだ。

このまま放任すると、農産物は年々減産して輸入食糧への依存度を増加し、自給食料五十%を割るのも十年乃至十五年以内であろう。さりとて零細個人農業の生産意欲をたかめるために、農産物の政策価格を世界水準の四倍五倍とすれば、輸出貿易品の生産原価に反映してその方面から危機を招くであろう。

要するに根本禍根は零細個人農業そのものにある。高速道路の中

に自転車を乗入れたに等しい零細個人百姓が、国家の危機を招いている。打開策として農家自身の反省による一村協同化か、革命により一挙に土地国有化か二者択一の段階に来ている。その認識を欠く人こそ国を誤る危険人物である。

七、一村協同化農業の画期的な利益

農業こそ近代化、機械化に最適な産業であり、その規模により十倍百倍の能率化も易々たるものである。また今の日本の文化水準から考えても、近代化機械化もできない旧式農業は、今日以後の青年男女は見向きもしないであろう。さてその近代機械化農業への転換となると、日本の場合一村協同化、一部落協同化が大前提となるが、前述の通り民族性からみて全く不可能と思っていた漢民族でさえ美事な人民公社に結集したのだ。同胞兄弟の国日本で一村協同化など、その気になれば朝飯前の仕事であろう。もし今の零細個人農業に固執して踏切りがつかず、あと十年たったらどうなるか。考えただけでも悪寒をおぼえる思いである。まず協同化の特長利点八項目を挙げて参考に供す。

第一に、最大の国益として水田二毛作可能の利点

明治、大正時代の田園風景を知る人なら、だれでも懐しい思い出があろう。弥生四月の汽車の旅、車窓に眺める田園の美、青、黄、赤と色とりどりの一面に毛せんを敷きつめたような絶景観を。これぞ大麦、小麦、菜種、馬鈴薯等々の水田裏作風景であった。

それが終戦を境として殆んど姿を消してしまった。麦も種油も馬鈴薯も多々ますます必要であるのに、今の零細個人農業では、労多くして効少なく、何を作っても引き合わないから、世界水準の二倍三倍の政治価格で保護している米だけ作って、一年三百六十五日の内百三十日だけ米作に利用して、あとは遊休農地となっている。

百ヘクタール単位の近代化農業に移行すると、小麦ほど労少くして儲かる作物は外にないという。殆んど需要の全量を輸入に依存する日本で、なんとも勿体ない話ではないか。一村協同化農業となれば、農耕地を整備して、近代化経営が可能となり、水田二毛作を可能とし、農業経済の立直しに大きく役立つであろう。また従来水田二毛作を不可能としていた東北や北陸地方でも、機械化農業のため牧草や青刈麦の栽培が可能となり、有畜農業が一段と有利となり、安価な自給食糧を増産することができる。

近代化機械化農業は農作業の超能率化のため、短期間に耕耘、地均、施肥、蒔種、刈取、収獲作業が可能のため、農地有効利用度が零細個人農に比較して二倍となり、革命的な成果を期待することができる。

前述の通り上野さんの新利根共同農場をみると、あの地方の稲刈りが九月早々であり、稲刈、耕耘、移植と二週間という短期間に終るし、十一月末には家畜餌料の美事な蕪が大量に収獲され、そのあと地を利用して牧草蒔をすれば翌年六月中旬の田植時までに立派に成長した牧草が収獲され、牧草根はそのまま有機質肥料として稲作に役立つ。

そんな早業のできるのは協同化による大企業近代機械化農業の特権であって、農地利用率二倍化の利益を見のがすことはできない。狭い国土の限られた農地、これを百%活用は農民最大の義務であり、

零細個人農業ではその義務を果し得なくなっている。

第二に、農業協同化による分業の利点

汗の農業、精励恪勤農業時代は百姓百種の何でも屋農業が美風でもあった。だが近代機械化農業、科学農業時代になると、何でも屋農業では何もかも半端の素人で、高性能機械の完全操作ができない。何もかも物真似農業になってしまう。

数年前、四国九州方面を二週間に亘ってキブツ講演旅行をした際、農家に宿泊したので、参考のためにその農家の手持ちの農機器を調べてみたことがあった。あの地方では一ヘクタールの水田を持った農家は中堅農家であるが、そんな一ヘクタール水田を持った農家の納屋を調べてみると、大型トラクター、小型耕耘機、田植機、稲刈機、籾摺機、製縄機、製粉機、噴霧器、消毒機、農薬散布機、揚水機、精米機、小型電動機各種三台の他、まだまだあり、数えきれないほどであった。

その何れも一年三六五日の中三五〇日ぐらいは遊休設備となって錆び腐れており、三年五年を経過すると旧式化して使いものにならない。また新品を購入する。その上高級化するほど操作が困難で未熟ゆえの破損、折損常習化、これで儲かったら奇蹟であろう。しかもその購入資金は農業収入ではなく、出稼ぎ労働賃金が大半であるという。こんな農家の泣き事をきいてもはじまらない。

一村協同化成って、何百ヘクタールでも計画的作業となれば、適者適役、分業化し専門化して、技能熟達、能率向上で初めて機械化の使用効率を高め生産力の向上に役立つのである。

前記の通り、僅か一ヘクタール農家でも、あれほどの農機を使用する機械化時代である。百姓百種の何でもやる零細農業など成立つ時代ではない。イスラエルのキブツ農業で、その農機修理工場をみると、立派な設備、優れた技術、熟練した操縦者、近代化農業とはこれでなければならないと考えさせられた。日本だって一村協同化農業に踏み切れば、分業の確立で必ずそうなる。またそうならなければ、今後の青年男女は農村から全部逃げ出してしまい結局、墓石が残るだけとなろう。

第三に、協同体化農業成れば老人天国

今の日本の一千万老人中、安心立命の心境にあるもの幾人あるであろうか。世界の文化国家といわれる国では、国民の平均寿命が七十才を越えており、個別経済生活のむづかしさもあって、どこの国でも老人問題は重大化している。日本に於ても戦後急速に国民の平均寿命が延びて男女平均で七十才を越え、六十才以上の老人が、総人口の一〇%、一千万人を突破する勢であり、真に目出度いことではあるが、国策的にも家庭的にも幾多の問題を投げかけている。昭和三四年には老人福祉法案も国会を通過して、対策に乗り出したはずであるが、全国一千万老人の物心両面の救いとなると、そんなに単純なものではない。老人ホームの増設とか、老人年金の増額とか、形ばかりのお茶をにごすだけで勢いっぱいであろう。

さて人間は誰でも、老後のことを考えるから一生懸命に働きもする。無理な貯金もして来たであろう。だが変転常なき経済界に対処して、何十年後の老後の保証などできるものではない。昭和三〇年ごろと云えば今から二十五、六年前であるが、いくら働いても一日三円ぐらいであった。ろくろく食わずに預金しても、一万円の貯金を

するには十年はかかった。そんな貯金は今は一ヵ月の食費にもならない。実はそんな貯金貧乏老人だって全国に何百万人も泣いている。これからとても同じこと。

そんな気の毒な老人たちも、大半は本人の責任でも罪でもない。真面目で正直で時の政府に忠実であった善人故の不幸でもある。

老人福祉も政治の手の届く範囲は一部分にすぎない。それは善政とか悪政の問題ではなく、何かを求める方にも無理がある。仮に国家予算の全額を老人福祉費に振向けて、宮殿のような老人ホームを造営してくれても、養老年金をたんまり頂載しても、心の救いがなければ生きた屍にすぎない。世界一の老人福祉国家、スエーデンが世界一の老人自殺国であることでも判ろう。老若男女の別なく常に生甲斐ある生活の中にのみ幸福がある。

零細個人農家の老人の悩みは別にある。彼等は貨幣に縁はうすくとも、食物を作る農民だけに衣食住の不安はない。三ちゃん農家の老人夫妻は毎日の仕事に追われて、夢中で働く内はせめてもの幸せであるが、ひとたび病気にでもなったら、その哀れさ惨めさは、言外の沙汰である。（農夫病だけ一項を設ける）

私がキブツ農業社会を、最初に視察したのは満七十才の秋であったから、老人問題には特に関心があり、その小気味のよいほど鮮かな解決に感銘し、帰国後、「月刊キブツ」にも書き、各地のキブツ講演会にも口を極めて絶讃しているが、その概要を述べると、

「キブツ社会は老人天国」

キブツ社会の家庭生活は夫婦単位であるから、老人夫妻といえども二人で別に暮している。別居といっても隣同志であり毎日出入りも自由、三度の食事も大食堂で共にするから、淋しくもない。もし独身者となれば老人ホームに入るが、ここにも世話係がいてお世話をしてくれるので不自由はない。病気になっても怪我をしても、キブツ内に病院もあれば、医師も看護婦もおり、一切平等無料であるから不便も不安感もない。

キブツでは六十五才以上は労働の義務はないが、農業に年令なしで、健康であるかぎり七、八十才になっても自由に花造りとか、工芸品とか、小説書きとか、公園の草取りとか、なんでも気まかせにやっているから、反って毎日が楽しい。

そしてキブツの社会秩序は、平等と古参順で保っているから、老人ほど優遇される。例えば、新築住宅が毎年何十戸づつ落成するが、その入居順位は古参順であるから、老人夫妻に優先権がある。テレビの普及でも、一度に何百個と購入することはキブツの経済が許さない。そんな時には三年計画とか四年計画で買入れるから、その取付けも古参順であるから、老人優先になる。

私有財産を持たないキブツでは、何千ヘクタールの農耕地も、立派な大建築も、文化施設も、誰のものでもない。皆のものである。個人のものは失い易いが、共有のものは盗まれも取られもしない。永久保存が出来る。一切が自分のものではないが、自分達のもの。老人たちは過去の努力を心に誇りながら、広い中央センターを散歩し、如何にも幸福な毎日である。

そして何より幸わせなことは、毎日が老若男女の渾然一体化した生活そのものにある。老人も老を忘れて若々しく、病者も病を忘れて健康になる。いくら立派な老人ホームでも、老人ばかりの集団生活では姥捨山にすぎない。キブツの生活こそ正に老人天国である。

そして医者も看護婦も丸抱えの老人生活は億万長者も遠く及ばぬ

物心両面の老後の余生である。日本でも一村協同体化成れば百%そうなるのである。

第四に、農村の、農夫病患者が救われる

最近の死亡統計をみると、第一位が癌で第二位が脳溢血であるが、その二病とも農村が圧倒的に多いので、一名農夫症とも云われている。その原因を白米飯の多食にあろうと云われているが、実はもっと直接的な原因は、零細個人農業の過労と不規則生活にある。その卑近の実例は、農繁期の発病が断然多いことでも明らかであり、また個人農家の男女の老化年令が一般人より十年も早いことでも立証できよう。

そして脳溢血の後遺症である脳卒中忠者が、全国に五十万人といわれているが、その内三十万人は農家であるという。人口比率でみて実に五倍に当る数字である。農村に於けるその脳卒中忠者の悲惨極まる生活は、殆んど零細個人農家の悲劇である。

数年前、その惨状を農協が発表して、新聞紙上で問題化したことがあった。三ちゃん農業の一ちゃんである老農夫が倒れて半身不随寝たきり生活三年五年、納屋の片隅みで生きながらの屍となって、苦悶を訴える悲しみの声が街道にまできこえてくる。

だが農業労働と看護の疲れで見るかげもない嫁女の姿をみると、責める勇気は隣人にもない。入院させたくてもそんな患者の収容力がないし、看護に行く手もない。その金もない。嫁女が農作業を休んだら一家が干乾しになる。こんな悲惨な農夫病忠者が全国に何十万人といる日本なのである。

夫婦二人の個人農家で、乳牛十五頭も飼うと、精励恪勤を賞めるまえに、生命を大切にせよと怒鳴りたくなる。朝は四時起きして、夕食は午后の八時から九時。昼飯も立食いで十六時間労働。日曜も祭日もない。風邪にかかっても寝るひまもない。どんな健康体でも、年に一度や二度の風邪ぐらい仕方がない。それが反って休養の絶好機会ともなるが、個人農業の乳牛飼育ではそれができない。三十八度の熱を無理して、搾乳中に脳溢血で倒れた例も少なくない。

昔から勤勉を美風とした誉め言葉ならいくらでもあるが、過労を罪悪として戒め言葉がない。私欲のために共同化ができない。無理を平気で、命を摺り減すような個人百姓、まだ四十代というのに白髪の歯抜け、農家の若死の大半は乱食と過労が原因である。零細個人農家に農夫症はつきもの。不規則な出稼ぎ労働が更に拍車をかけている。

一週四十時間勤務、週休二日制の時代に、朝に星をいただき夕に星を負って帰る個人百姓。そんな自殺行為の農家の後継ぎもなくなるであろうから、放任しても幾十年か後には死に絶えるであろう。農夫症の汚名返上のためにも、イスラエルのキブツ農業のように一日八時間一週六日勤務の励行できる近代化農業に移行したいものである。

第五に、協同体生活費は半減する

キブツの合理化生活は参考になるが、今度は国内の実績を報告しよう。奈良県榛原町の心境農産といえば、日本一の畳床工場で有名であるが、今は精薄者擁護施設もあるので、総人口は二百名ぐらいの共同生活体であるが、その中心人物は尾崎増太郎さん。毎日多数の視察者相手に話す言葉——。

「人間社会は協同協力で保たれている。個人の力には限度がある。農業でも工業でも協同せにゃ駄目だ。食生活だって何でも半値以下で賄うことができる。ここでは肉でも魚でも大阪市場で大量買いすると五割安だ。果物もリンゴでもミカンでも、貨車一パイで買うから、町で一個五十円の夏ミカンが、ここでは原価がせいぜい二十円だ。野菜なども農家と年契約で買っているから、小売値の五分の一だ。衣類なども時期をみて貨物自動車一パイ買うので、半値以下。

元来日本の商業界は儲け本位の仕組みになっているから、小売となると三倍五倍もするのがざらにある。そんなのを平気で買っている個人生活者は、五万円の月給を二万円の価値にして使っているようなものや。協同生活をしてみるとそれがわかる。」

こんな調子で実物を示して教えてくれる。そして世界一の施設といわれる精薄者施設にしても、工場にしても、無産者の集まりで築き上げたもの。尾崎さんはよく云う。農業だって共同せにゃあ一生うだつがあがらない。わし等四戸の農家で共同生活をはじめたころは、散々悪口云うていた人達は、今でも気の毒なほど暗い生活をしている。

何も畳製造でなくとも、農業でなくとも、五十戸ぐらいで共同生活を本気で始めたら大変なことになる。近ごろこの町でも一日二千円ぐらいの労働賃金であるが、家族の四、五人もあると、食うのがやっとであろうが、共同生活なら半分は貯金ができる。仮に一人や二人病気で休んでも助け合いができるから だれも困らない。人間共同生活をせにゃあ、一生安心した生活はできない、と。

第六に、農村の文化都市生活

また昔話になるが、十年前に西欧農村視察の際、デンマークでも、西ドイツでも、農村の青年男女が都会を憧がれて、村を出て行くので困ると泣事を耳にした。その時は、日本でも同じですよ、と合槌を打っていたが、イスラエルのキブツ農業社会をみて、ハッと気が付いた。いやキブツ・ヤブネのバードロマ氏が開口一番、世界中で農村から若者が逃げ出さないのはキブツだけですよ、と云われたが、現代青年男女は文化の刺激を求めて都会にひかれるのだから、その文化を農村に取り入れて立派な農村文化都市を創ればよい。キブツのように五百戸でも六百戸でも理想的な集団生活では都市に勝る文化公園都市でも出来る。そして空気も水も太陽光線も青空も緑にも恵まれたキブツは、都会人の方から訪れるようになる。キブツのレストハウスが大繁盛するのもそのためである。

日本だって一村協同化成れば、空寺のような個別農家の家屋敷は不要になり、実質的なしょうしゃな個人住宅に代り、共同施設の大食堂、集会場、図書館、研究所、映画館、病院、産院、老人ホーム、保育所、幼稚舎等、都市にあるぐらいのものは何でも出来る。そして医師も看護婦も丸抱えの農業である。協同協力の偉力でそれが出来るのだ。

第七に、主婦を家庭の雑事から解放

民主主義思想が普遍化し、教育が進むに従って男女同権、婦人開放と女性問題が世間の話題になっているが、いくら男女同権であってもそれぞれの天分が違っており、夫婦生活では男は経済生活面を受けもち、女は家庭内を受けもっている。そんな良妻賢母で満足している女性は別として、社会性に目覚めてきた女性は、主婦専業に

は耐えられなくなっている。

日本では二昔ほど前までは、中産階級以上の家庭ではみな女中を雇入れて家事雑事を任せていたので不自由を感じなかったが、今はそれが出来ない。その上、核家族生活時代となって女性の家事育児の重荷が問題になり、また女性の社会進出との両立が問題化してきた。

ところがキブツ社会では、この難問題を鮮かに解決している。先にも述べたように、キブツでは男女とも一日八時間一週六日の労働であり、一日の間の十六時間、一週間に一日は男女とも全く自由時間であり、当番以外は雑用一ツない。育児も食事も洗濯も裁縫も、それぞれ分業で勤務時間内に終了している。

教育は幼稚園児から高等学校卒業まで、それぞれ担当の教育係に一任するので両親は面会も愛撫も自由だが、同居同寝はしない。

家庭生活は夫婦単位であるから、老父母との同居もない。女性も出産という天職以外は男女全く同じ自由があり、ここでは最早女性開放もウーマンリブも無い。その裏を返して言えば、キブツのような協同体社会でなければ、いくら騒いでみても、真の女性解放は実現しないであろう。

第八は、農村の保育、教育、医療問題

日本の農村は長い習慣で、個人農業本位にできているので、農家は田畑を中心に点々と散在しており、何をするにも不便、不利、無駄の標本のようになっている。だから託児所とか幼稚園とか、折角できても、一般に利用することができない。小学生、中学生の通学も不便や危険を考えると、それだけでも農村生活がいやになる。

医療問題になると更に致命的である。全国に無医村が三百もあると云うので問題になっているが、一村に一人や二人の医者がいても、十平方キロから百平方キロもある地方農村の散在農家からみると無医村と同様である。医者も人間である。いくら急病人が出ても真夜中の風雪の中を応診など命がけであり、一年も勤めたら逃げ出すのが当然である。自分の子供まで逃げ出す時代ばなれした農村に名医を迎え入れることなど無理な相談である。

文化の恩典を求めるのに農工商の別はない。農村といえども、考え方一つで、今日では都市以上の文化生活体が出来る。農耕地が家屋の周囲に必要であったのは、手農業時代のこと。各戸自家用自動車を持つ時代、散在農家の必要性は何もない。近代的文化農業都市化、これは一村協同体化すれば自然に生れる新文化村でもある。医者も看護婦も教師も僧侶も、雲集するであろう。

以上、協同体化の利点八項目を挙げたが、まだまだ利点も特長も無限にある。今日以後の日本は都市の公害が大問題化し、健全な文化農業都市を必要とする。国土の有効適切な利用活用が急務である。